

問題児たちと炎術士が異世界から来るそうですよ？

YD病感染者

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

炎の翼を持ち、八匹の炎の龍を従える本作の主人公：不知火 火焰（しらぬい かえん）の元に箱庭への招待状が届く

この作品は問題児シリーズと烈火の炎のクロスオーバーです。烈火の炎を知らない方でも楽しめるはずです。

処女作ですので温かい目で見ていただければ幸いです。
よろしくお願ひします

目

次

プロローグ

キャラ設定

第1話

第2話

第3話

第4話

第5話

第6話

25 21 17 14 10 7 4 1

プロローグ

それは真夏の昼下がりに起きたことであつた

「あ～つまんねえ。超つまんねえ。

こんなクソ山奥に隠れるんじやなかつたな…：

本当に何もねえしよ…」

この山奥の小屋に隠れている彼、不知火 火焰 は心底不機嫌そうに咳いた。

「ゴロゴロするのにも飽きたしウダウダするのも飽きたな
何かこう、面白いこと無いかねえ…」

外に遊びに行こうにも政府の連中に見つかつたら厄介だし

なあ…」

一介の高校生が政府に追われ山奥に隠れている事なんてことは早々ないだろう。

しかし彼は違つた。

右腕から炎を出し、背中から炎の翼を出し、さらには八匹の炎の竜を従えている彼にとつては、政府に追われるなんて日常茶飯事だった。

政府にとつても、彼の能力は未知数ですぐに何とかしないといけないから必死になつて彼を探している。

「畜生、ラノベを買いに行くときに飛んでいるところを見られてなかつたらなあ…」

てか、実験に付き合うわけ無いじやん
解剖とか絶対されるぜ。

ああ、おつかねえ」

何か良い暇潰しは無いか、彼は考えたが何も思い付かなかつたので、
、しようがないから天井の木目の数でも数えようかなと上を向いた
ら

目の前に手紙が現れた

「ん？何だこれ？手紙？」

ふむ…… 差出人不明な上に、急に現れた手紙か…… いいねいい
ね！超面白そうじやん！

これで天井の木目の数を数えなくてすむぜ！」

彼は上機嫌になりながらその手紙を開けた

手紙にはこう書かれていた

『 悩み多し異才を持つ少年少女に告げる。 その才能(ギフト)を試
すこと望むのならば、己の家族を、友人を、財産を世界の全てを捨
て、我らの”箱庭”に来られたし』

「OK！このクソつまんない世界を抜け出せるなら、箱庭でも異世界
でもいってやらあ！」

なんて言つていたら彼の体が光に包まれる

「お！　このまま召喚される感じか、楽しみだなあ！」

その言葉が最後、彼の体はこの世界から消え、箱庭の世界の空に投
げ出されていた。

彼が最初に目に入ったのは巨大な滝だつた。
それは地球上に存在するどの滝よりも大きく、自分が異世界に来たこ
とを証明できたので、感情が高ぶり、落下しながら叫んだ

「アハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

ハハハハハハハハハハ！

ここが新しい俺の世界か！

いいねいいね！

向こうでは楽しめなかつたことを思う存分楽しんでやるぜえええ
ええええええええ！』

この物語は暇が嫌いで嫌いで仕方がない少年が問題児たちと箱庭
の英雄になる話である。

キャラ設定

オリキャラ紹介

不知火 火焰（しらぬい かえん）

17歳

身長 170 cm

体重 55 kg

本作のヒーロー

性格

仲間想いでちょっと熱血

頭は結構回る（十六夜君の次くらい）

暇が大嫌いで常に何かしていたい。

暇潰しのために問題児的行動を取ることもしばしば。
甘いものが大好き

ギフト

八又の火竜（やまたのかりゆう）

八匹の火竜の能力を使えるギフト。

火竜は神靈であり、その宿主の火炎はかなりの身体能力をもつ
身体能力の差は大体このぐらい

十六夜／黒ウサギ／火炎／耀／飛鳥

八匹の火竜にはそれぞれ名前がある

竜之炎壱式：碎刃（さいは）

8つの目と後ろに伸びた一本角の火竜

炎の剣を出現させる事ができる。近距離担当。なお、炎の温度は調節可能

竜之炎式式：崩（なだれ）

大きな目と長いひげが特徴の火竜

炎を球状にして発射して攻撃する。遠距離担当。
大きさ、数などは調節可能

竜之炎参式：焰群（ほむら）

十字に開く鳥の嘴のような口を持つ
炎をムチ状に形成し、近中距離での攻撃を担う。また腕に巻きつけてパンチ力を強化することもできる。

竜之炎肆（し）式：刹那（せつな）

一見何の造形もないのっばらぼうのような火竜だが
発動と共に刹那の隠された目が開き、その目を見たものを一瞬にして燃やし尽くす「瞬炎」を持つ
火竜の同時召還に一番向かない火竜。
ある程度火力の調整が可能

竜之炎伍式：円（まどか）

三つの目で火の玉を発生させ
それらを頂点とした「面」による炎の結界を作り、攻撃を跳ね返す。
この結界は自分だけではなく色々な場所に張ることができ
敵を閉じ込めるといった使い方も可能。頂点の火の玉を破壊されると結界が小さくなる

竜之炎陸（ろく）式：墨（るい）

爛れたような皮膚の火竜

術者である火竜が頭に描いたものを炎の幻として見せることができる「幻炎」を持つ

火竜の姿を作り出し、分身の術のような使い方もできる
また幻術でありながら炎もあるため
攻撃能力もきちんと備わっている

竜之炎漆（しち）式：虚空（こくう）

1つ目が特徴の火竜。

1つの炎弾を作り出し、そこから強力なレーザー砲のような炎を放つ。単純な破壊力という面では八竜最強を誇る

竜之炎捌（はち）式：裂神（れっしん）

後ろに伸びた2本の角とトサカ状の頭髪を持つ火竜
死者の魂を取り込んで術者の炎とする能力を持つ

ギフトの特徴

火竜は同時召還ができる、それぞれを組み合わせることによつて攻撃する事ができる

火竜の同時召還をするときは数の大きい火竜から召喚しないと術者にダメージが入る

副産物的なものとして、手を強く擦れば手から炎がでたり、背中から炎の翼を出して飛ぶこともできる

戦闘スタイル

基本は碎刃と焰群での肉弾戦

炎の翼で飛び回りながら崩をぶつ放すことも多々あり。
どどめや強い相手には問答無用で虚空をぶつ放つ。

好みの女性のタイプは耀

第1話

さてと… ただ今絶賛落下中だけどどうしようか…。

まず炎の翼を出して飛ぶ→ショートカットの娘を右腕でつかむ→ロングヘアの娘を左腕でつかむ→猫を頭にのせる→金髪の野郎を足でつかむ→着陸成功！

「よし、これでいこう」

俺は翼を出して三人と一匹を無事、地面までおろした。

何てことをしていると、ロングヘアの娘と金髪の野郎が罵詈雑言を吐き捨てた

「し、信じられないわ！まさか問答無用で引きずり込んだ拳句、空に放り出すなんて！」

「右に同じだクソツタレ。場合によつちやその場でゲームオーバーだぜコレ。石の中に呼び出された方がまだ親切だ」

「…………。いえ、石の中に呼び出されては動けないでしょ？」

「俺は問題ない」

「そう。身勝手ね」

二人はフン、と互いに鼻を鳴らしている。

するとショートカットの娘が俺に話しかけてきた

「私と三毛猫を助けてくれてありがとう」

「どういたしまして。流石に異世界まで来て濡れるのも嫌だしな」

「それについては私からもお礼を言わせて貰うわ。ありがとう」

「俺もだ、濡れなくて助かつた」

「おう。どういたしまして」

なんて話しているとショートカットの娘は、三毛猫を抱えながら

「ここ、何処だろう？」

「さあな。まあ、世界の果てっぽいものが見えたし、どこぞの大亀の背

中じやねえか？」

ショートカットの娘の呟きに金髪の野郎が答える。

何にせよ、俺達の知らない場所であることは間違いないようだ。

すると金髪の野郎が周りを見渡しながら

「まず間違いないだろうけど、一応確認しておくぞ。もしかしてお前達にも変な手紙が？」

「そうだけど、まずは”オマエ”って呼び方を訂正して。私は久遠飛鳥よ。以後は気をつけて。それで、そこの猫を抱きかかえている貴女は？」

「……春日部耀。以下同文」

「そう。よろしく春日部さん。次に、私達を助けてくれた親切な貴方は？」

「俺は不知火火焰。気軽に火焰って呼んでくれ。よろしくな！」

「よろしく、火焰君。最後に野蛮で凶暴そうなそこの貴方は？」

「高压的な自己紹介をありがとよ。見たまんま野蛮で凶暴な逆廻十六夜です。粗野で凶悪で快楽主義と三拍子揃ったダメ人間なので、用法と用量を守った上で、適切な態度で接してくれお嬢様」

「そう。取り扱い説明書をくれたら考えてあげるわ、十六夜君」

「ハハ、マジかよ。今度作つとくから覚悟しどけ、お嬢様。」

「ハハッ君たち変わつてるなあ」

「背中から翼をだす火焰（君）には言われたくないぜ（わ）」

自己紹介がすんだところで十六夜が苛立たしげに言う

「で、呼び出されたは良いけど何で誰もいねえんだよ。この状況だと、招待状に書かれていた箱庭とかいうものの説明をする人間が現れるもんなんじやねえか？」

「そうね。何の説明もないままでは動きようがないもの」

「……この状況に対してもう着きすぎているのもどうかと思うけど」

「耀が言えたことじゃないだろう。」

「よ、耀？」

「おう、そうだ。……なんだ？もしかして名前で呼ばれるの嫌だつたか？」

「だとしたら悪いことをしたな

「ううん。単純に呼ばれなれてなくて驚いただけだから嫌じやないよ」

「そうか。じゃあ名前呼びさせてもらうわ」

すると、十六夜がため息混じりに呟く

「仕方がねえな。こうなつたらあそこに隠れている奴にでも話を聞くか？」

俺達の視線が草むらに集まる

「なんだ、貴方も気づいていたの？」

「当然。かくれんぼじや負けなしだぜ？ 火焰と春日部も気づいていたんだろう？」

「まあ、あつい視線を送られたしね」

「風上にたたれたら嫌でもわかる」

「……へえ？ 面白いな」

「で、どうする？ 火の玉でも投げ込んでみる？」

俺がそういうと、三人は

「そんなことも出来るのか」

「そうね、思い切りやつてくれるかしら」

「……ふあいと」

と、言うのでじやあ投げ込もうかと、崩を発動させようとしたら
「わあわあわあわあわあわあ！ 待つて、待つて下さい！ お願ひですから投
げないで下さい！」

なんて言いながらナイスバディなウサギ人間がでてきた。

第2話

「何あれ？ コスプレ？」

俺がそう呟いていると、三人は理不尽な召集を受けた腹いせに殺気のこもつた冷ややかな視線をウサギ人間にむけていた。

ウサギ人間は少し怯みながら

「や、やだなあ御三人様。そんな狼みたいに怖い顔で見られると黒ウサギは死んじゃいますよ？」

ええ、ええ、古来より孤独と狼はウサギの天敵でございます。

そんな黒ウサギの脆弱な心臓に免じてここは一つ穩便に御話を聞いていただけたら嬉しいでござりますヨ？

それと、この格好はコスプレじゃないです！」

「断る

「却下

「お断りします」

「君の名前、黒ウサギって言うんだね」

「拒否！ ていうか最後の方だけちょっとマイペース過ぎませんか!?」

」

なんて黒ウサギが叫んでいると耀が隣に立ち、黒いウサ耳を根っこから鷲掴みにして、

「えい

「フギヤ！」

力いっぱい引っ張っていた。

女の子が出しちゃいけないような声を出している気がするけど気のせいだろう。そうに違いない。

なんて俺がひとりで領いていると、

「ちょ、ちょっとお待ちを！」

触るまでなら黙つて受け入れますが、まさか初対面で遠慮無用に引き抜きに掛かるとは、どういう了見ですか!?

「好奇心のなせる業」

「自由にもほどがあります！」

「へえ？このウサ耳って本物なのか？」

あ、今度は十六夜が黒ウサギのウサ耳を右から掴んで引っ張つているわ。

痛そうだなあ。

「…………。じゃあ私も」

飛鳥も加わったな……。

俺も後で触りに行こうかな？

「ちよ、ちよつと待ーーーー！」

と俺がワクワクしていると左右に力いっぱい引っ張られた黒ウサギは、言葉にならない悲鳴を上げ、その絶叫は近隣に木霊した。

—————○————○—————

「あ、あり得ない。あり得ないのですよ。まさか話を聞いてもらうために小一時間も消費してしまうとは。学級崩壊とはきつとこのような状況を言うに違いないのデス」

「良いからさっさと進める」

「そーだそーだ」

結局触らせてもらえなかつたしな。

「それではいいですか、御四人様。定例文でいいますよ？　言いますよ？　さあ、言います！

ようこそ、”箱庭の世界”へ！　我々は御四人様にギフトを与えた者達だけが参加できる『ギフトゲーム』への参加資格をプレゼントさせていただこうかと召喚いたしました！」

「「「ギフトゲーム？」」

俺達の声が重なる

「そうです！　既に気づいていらっしゃるでしょうが、御四人様は皆、普通の人間ではございません！」

その特異な力は様々な修羅神仏から、悪魔から、精霊から、星から与えられた恩恵でござります。

『ギフトゲーム』はその”恩恵”を用いて競いあう為のゲーム。

そしてこの箱庭の世界は強大な力を持つギフト保持者がオモシロ

オカシク生活出来るために造られたステージなのでございますよ！「へえ、俺みたいな力を持つている奴がいっぱいいるのか。

めっちゃ楽しそうやんけ

やっぱここにきて正解だつたかな。

すると飛鳥が質問をした。

「まず初步的な質問からしていい？貴女の言う”我々”とは貴女を含めた誰かなの？」

「YES！ 異世界から呼び出されたギフト保持者は箱庭で生活をするにあたつて、多数とある”コミュニティ”に属していただきます。」「嫌だね」

おい十六夜

「属していただきます！ そして『ギフトゲーム』の勝者はゲームの”主催者”が提示した賞品をゲットでくるというとつてもシンプルな構造となつております」

「……。”主催者”って誰？」

耀が聞く

「様々ですね。暇をもて余した修羅神仏が人を試すための試練と称して開催されるゲームもあれば、コミュニティの力を誇示するために独自開催するグループもございます。

特徴として前者は自由参加が多いですが、”主催者”が修羅神仏なだけあって凶悪かつ難解なものが多く命の危険があるでしょう。

しかし見返りは大きいです。

”主催者”次第ですが、新たな”恩恵”を手にすることも夢じやありません。

後者はそうではない時が多いです。例えば参加をするのにチップを払う必要があります。

「チップにはなにを？」

「様々ですね。金品・土地・名誉・利権・人間……そしてギフトを賭けることも可能です。新たな才能を他人から奪えればより高度なギフトゲームに挑むことも可能でしょう。ただ、敗北した場合はギフトが奪われるでの悪しからず」

え？ なに？ ギフトとられるの？ こつわ！

……よし。俺も質問してみるか

「ゲームそのものはどうやつたら始められるんだ？」

「コミュニティ同士のゲームを除けば期日内に登録してもらえばOK！ 商店街などでも小規模のゲームが開催しているのでよかつたら参加してくださいね♪」

「つまり『ギフトゲーム』はこの世界の法みたいなもんなんだな？」

「おっ、なかなか鋭いですね。しかしこの箱庭の世界でも強盗や窃盗は禁止ですし、金品での物々交換も存在します！」

「そうか、ありがとう。」

「さて、この世界に皆さんを召喚した黒ウサギには、箱庭の世界における全ての質問に答える義務がありますが、このまま答えていると日が暮れてしまうので、ここから先は我らのコミュニティでお話させていただきたいのですが…………よろしいでしようか？」

すると清聴していた十六夜が声を上げる。

「まてよ、まだ俺が質問してないだろ」

「…………どういった御質問で？ ルールですか？ ゲームそのものですか？」

「いいや違う。そんなことはどうでもいい。俺が聞きたいのはたつた一つだ黒ウサギ。

…………この世界は…………面白いか？」

「うん。確かにそれは大事だな

「YES！『ギフトゲーム』は人を超えた者たちだけが参加できる神魔の遊戯。箱庭の世界は外界よりも格段に面白いと、黒ウサギは保証します♪」

第3話

十六夜が質問を終えた後、俺達は黒ウサギに連れられてデカイ門まで来ていた

……一人をのぞいて

「ジン坊つちやーん！ 新しい方を連れてきましたよー！」

黒ウサギがそう声をかけると、ダボダボのローブを被った男の子が返事をした

「お帰り、黒ウサギ。そちらの御三方が？」

お？ 気づくか？

「はいな、こちらの御四人様が……」

あ、気づいた

「…………え、あれ？ もう一人いませんでしたつけ？ ちょっと目つきが悪くて、かなり口が悪くて、全身から”俺問題児！”ってオーラを放っている殿方が」

「十六夜のことか？ あいつなら”ちょっと世界の果てを見てくるぜ！”って言つてたぞ

でも俺は行かなかつたんだ。偉いだろ！」

「な、なんで止めてくれなかつたんですか！ てか行かないのが当たり前です！」

えへへじやあ、行つときやよかつたなあ

なんて考えていると飛鳥が黒ウサギに答えていた

「止めてくれるなよ”って言われたもの」

うんうん。言つてた言つてた

「ならどうして黒ウサギに教えてくれなかつたのですか!?」

耀が答える

“黒ウサギには言うなよ”と言われたから

「嘘です、絶対嘘です！ 実は面倒くさかつただけでしよう御三方！」

「「うん」「

あ、黒ウサギが前のめりに倒れた

大丈夫かな？

「た、大変です！」世界の果てにはギフトゲームのため野放しされて
いる幻獣が

「へえー、幻獣なんているのか」

ユニコーンとかか？

「は、はい。正確にはギフトを持った獣を指す言葉で、特に”世界の果て”付近には強力なギフトを持ったものがいます。出くわせば最後、とても人間では太刀打ちできません！」

マジかこつわ！

「あら、それは残念。もう彼はゲームオーバー？」

「ゲーム参加前にゲームオーバー？…………斬新？」

「確かに斬新だな」

なんて、俺達が言つていると

「冗談を言つている場合じゃありません！」

オコラレテシマツタ

ん、黒ウサギが立ち上がった

「はあ…………ジン坊っちゃん。申し訳ありませんが、御三人様のご案内をお願いしてもよろしいでしょうか？」

「わかった。黒ウサギはどうする？」

「問題児を捕まえに参ります。事のついでに……”箱庭の貴族”と
謳われるこのウサギを馬鹿にしたこと、骨の髓まで後悔させてやります」

す

おおゝ髪が青からピンクになつた

綺麗だな

あ、門柱に登りだした

「一刻ほどで戻ります！皆さんはゆっくりと箱庭ライフを御堪能下さいませ！」

うおつ！速つ！

うわ門柱に亀裂入つてるやん

「…………。箱庭のウサギはずいぶん速く飛べるのね」

「ウサギ達は箱庭の創始者の眷属です。強い力と様々なギフトの他に

特別な権限を持ち合わせた貴種ですので」

……。黒ウサギって凄いのな

ただのバカかと思っていたわ

「黒ウサギも堪能して下さいと言つてたし、先に箱庭に入りましょうか」

「あ、はい。僕はコミュニティのリーダーをしているジン＝ラツセルです。齡十一になつたばかりの若輩ですがよろしくお願ひします」

十一歳でコミュのリーダーをしているのか……。

あれ？うちのコミュちょっとヤバめ？

「そう、よろしく。私の名前は久遠飛鳥よ。そこの猫を抱えているのが」

「春日部耀。あの考え込んでいるのが」

「ん？ああ、不知火火焰だ。気軽に火焰つて呼んでくれ」

「分かりました。それじゃあ箱庭に入りましょう。まずは軽食でもとりながら話をしましようか」

ジンがそういつたので俺達は箱庭の門をくぐつた

第4話

——箱庭二一〇五三八〇外門・内壁。

飛鳥、耀、俺、ジン、三毛猫の四人と一匹は石造りの通路を通つて箱庭の幕下にでると、

ぱつと俺らの頭上に眩しい光が降り注いだ。

遠くに聳える巨大な建造物と空を覆う天幕を眺めていたら

『に、にやあにやあにやあ！にやあにやあにやあ！（お、お嬢！　外から天幕の中に入つたはずなのに、お天道様がみえとるで！）』

「……本当だ。　外から見たときは箱庭の内側なんて見えなかつたのに」

「それは、箱庭を覆う天幕は内側に入ると不可視になるんですよ。

そもそもあの天幕は、太陽の光を直接受けられない種族のために設置されていますから」

「それはなんとも気になる話ね。

この都市には吸血鬼でもすんでいるのかしら？」

「え、いますけど

「……。そう」

なんて愉快な会話を繰り広げていた

しかし早くご飯食べたいなあ

「ねえジン、俺早くご飯食べたいんだけど」

「す、すみません。では彼処にしましようか」

俺達はジンが選んだカフェテラスに座る。

すると、注文をとるために店の奥から素早く猫耳の少女が飛び出てきた

「いらっしゃいませー。ご注文はどうしますか？」

「えーと、紅茶を二つと緑茶を一つ。あと軽食にコレとコレと」

『にやあにやあ（ネコマンマも頼む！）』

「俺はオレンジジュースとチョコケーキとパンケーキを。あ、パン

ケーキはシロップ多めで

うん、やつぱり甘いものは正義だよな

「……。意外だわ。火焰君つて甘党なのね。凄く似合わないわ」

「うん。唐辛子をおやつ感覚で齧つてそういうのに」

「お前らはどういう目で俺を見ているんだ!?」

「はいはーい。ティーセット三つにオレンジジュースとチョコケーキとパンケーキとネコマンマですね」

ん? ネコマンマなんて頼んだつけ?

「三毛猫の言葉、分かるの?」

あ、三毛猫ちゃんが頼んだのか

「そりゃあ分かりますよー私は猫族なんですから。

お歳のわりに随分と綺麗な毛並みの旦那さんですし、ここはちょっとびりサービスさせてもらいますよー」

『にやにやにやにや（ねーちゃんも可愛い猫耳に鍵尻尾やな。今度機会があつたら甘噛みしに行くわ）』

なんだろうこの三毛猫お歳のわりに凄い軟派なこと言つている気がする

「やだもーお客様たらお上手なんだから♪

やつぱりか!

「……箱庭つて凄いね、三毛猫。私以外に三毛猫の言葉かわかる人がいたよ」

『にやにやにや（来て良かつたなお嬢）』

「ちょ、ちよつと待つて。春日部さんつてもしかして猫と会話が出来るの?」

耀がコクリと頷いて返した

「もしかして猫以外にも意思疏通が可能ですか?」

「うん。生きているなら誰とでも話が出来る」

「へえー。すげえなそれ。超カッコいい」

「そうね、とても素敵だわ。じゃあ、そこに飛び交う野鳥とも会話が

?」

「うん、きつと出来…………る?」

ええと、鳥で話したことがあるのは雀や鶯や不如帰ぐらいだけど………ベンギンがいたからきっと大丈夫

「しかし、全ての種との会話が可能なら心強いギフトですね。

この箱庭において幻獣との言語の壁というのはとても大きいですから」

「そうなんだ」

「はい。一部の猫族やウサギのように神仏の眷属として言語中枢を与えていれば意思疏通は可能ですが、

幻獣はそれそのものが独立した種の一つです。
同一種か相応のギフトがなければ意思疏通は難しいというのが一般です。

箱庭の創設者の眷属にあたる黒ウサギでも全ての種とコミュニケーションをとることはできないはずですし」

「そう……春日部さんは素敵な力があるのね。羨ましいわ」

「あ、分かる。めっちゃイカしてるよな」

「久遠さんと火焔は」

「飛鳥でいいわ。よろしくね春日部さん」

「う、うん。飛鳥と火焔はどんな力を持つてるの」

「俺か？俺はまああれだ、炎とか、炎の竜とか、炎の翼とか出したり、その竜の能力とか使える」

「なにそれ！凄い！今、炎の竜だせる？」

「いや、今出したらここら一帯が燃える」

「あら、火焔君も素敵な力を持つてるのね」

「そりやどうも」

「で、飛鳥はどんな力を持つてるの？」

「私？私の力なんて酷いものよ？だつて」

「おんやあ？誰かと思えば東区画の最底辺コミュ”名無しの権兵衛”的リーダー、ジン君じやないです。今日はオモリ役の黒ウサギは一緒じやないんですか？」

「は？なんだこいつ？」

飛鳥の話が止まつちやつたじやん

「は？あんた誰？てか人様の会話を遮るとか何様？燃やすよ？」
本当に燃やしてやろうかこの野郎。

第5話

「は？あんた誰？てか人様の会話を遮るとか何様？燃やすよ？」

「こ、これは失礼いたしました。私は箱庭上層に陣取るコミュニティ
”六百六十六の獣” の傘下である」

「烏合の衆の」

「コミュニティのリーダーをしている、つて待てやゴラア!! 誰が烏
合の衆だ小僧オオ!!!」

おおくもしかしてジンつて結構面白い子だつたり？

「口慎めや小僧オ……紳士で通つている俺にも聞き逃せねえ言葉はあ
るんだぜ…………？」

し w ん w し w

紳士だつて w w w

どうみてもピチピチタキシードの変態にしか見えないのに w w w

「で w w w 、あんたは何の用でわざわざ俺達に話しかけたんだよ w w
w」

「火薬、それ煽つているようにしか聞こえない」

耀さんちよつとだまらつしゃい

「チツ………実はあなた方を我がコミュニティにスカウトに参り
ました」

「な、何を言い出すんですガルド＝ガスパー!?」

「黙れ、ジン＝ラッセル。貴様のコミュニティの現状を知らない御方

達なら騙せると思っていたのか？その結果黒ウサギと」

「ジンのコミュニティが壊滅寸前つて事なら皆知つているそ？」

「「ゑ？」」「

「いや、普通に考えて11歳の子どもがコミュニティのリーダーつて
おかしいだろ。ジンが特別凄いって訳でもなさそ удashi」

てか何？気付いていたの俺だけ？

「あなたのコミュニティが壊滅寸前つて話は本当なの？ジン君」

「そ、それは……」

「よろしければジン＝ラッセルのコミュニティが壊滅した経緯などを

「話しますよ？」

「……そうね。お願ひするわ」

「承りました。では経緯を話す前に事前知識としてコミュニティの、

「名」と「旗印」の説明を」

「名」とは文字通りコミュニティの名前を指します。

「旗印」とはコミュニティの縄張りを主張する大事な物です。

これらを失うと”ノーネーム”という蔑称で呼ばれます。

もし自分のコミュニティを大きくしたいのならば双方合意の上で旗印を賭けた『ギフトゲーム』をすればいいのです。

私のコミュニティは実際にそうやつて大きくしましたから

「なるほど、理解したわ」

「ではここからはジン＝ラツセルのコミュニティが壊滅した経緯を話させていただきます」

「ジン＝ラツセルのコミュニティは箱庭の天災、魔王に襲われ一夜にして名と旗印を奪われ、”ノーネーム”となりました」

「ち、ちょっと待つて！名や旗印って双方合意じゃないと賭けられないとんじやないの？」

「通常は” そうです。

ですが魔王は違います。

魔王は” 主催者権限” という特権階級を持つ修羅神仏のことで、彼らにゲームを挑められたら絶対に断ることができない厄介なものです」「なるほど、だから貴方は何もない絶望的なジン君のコミュニティではなく自分のコミュニティへ私を加入させたがったのね」

「はい。レディのおっしゃる通りでござります」

「でも私は結構よ」

「あ、俺も（私も）」

「な、なぜでしょうか？ よろしければ理由を聞かせていただいても？」

「

「私、久遠飛鳥は――裕福だった家も、約束された将来も、おおよそ人が望みうる人生の全てを支払って、この箱庭に来たのよ。

それを小さな小さな一地域を支配しているだけの組織の末端とし

て迎え入れてやる、などと慇懃無礼に言われて魅力的に感じるとでも思つたのかしら。

だとしたら自身の身の丈を知つた上で出直してほしいものね、この

エセ虎紳士

「私は友達を作りに来ただけだから別に貴方はのコミュニティじやなくても良い」

「お、じゃあその友達一号に立候補するぜ」

「じゃあ私は友達二号に立候補するわ」

「うん。二人とも普通の人とは違う感じがするから大丈夫そうこれからよろしく」

「そ、そちらのジエントルマンはどうしてでしようか？」

「ん？まあ単純にお前のコミュニティが怪しいからかな。お前はさつき旗印を賭けてギフトゲームをしてコミュニティを大きくしていつた”って言つていたけど、普通そんな簡単に旗印を賭けるか？」

「どうなんだ？ジン」

「や、やむを得ない状況なら稀に。しかし、これはコミュニティの存続を賭けたかなりのリアケースです」

「だよなあ。普通はそんなポンポンと賭けないよなあ……

で、どうやつてコミュニケーションを大きくしたかお兄さん聞きたいなあ

……」

「そうね。私もそれ気になつていたわ。ということで

”ガルド＝ガスパー、貴方はそこに座つて私達の質問に答えなさい

”

「うわっ！すげえ！イスにヒビが入つた！」

「で、どうやつて旗印を賭けるよう強制させたのかしら？」

「」

「き、強制させる方法は様々だ。一番簡単なのは、相手のコミュニティの女子供を攫つて脅迫すること。これに動じない相手は後回しにして、徐々に他のコミュニティを取り込んだ後、ゲームに乗らざるを得ない状況に圧迫していつた」

「まあ、そんなところでしょう。貴方のような小者らしい堅実な手で

す。けど、そんな違法な手段で吸収して、あなたの下で従順に動いてくれるのかしら？」

「各コミュニティから、数人ずつ子供を人質に取つてある」

「チツ……この外道め」

「ええ、まつたくもつてその通りね。

で、その子ども達は何処に幽閉されているの？」

「もう殺した」

その瞬間、俺はコイツを殴り飛ばした

「グハアッ！な、何をするこのクソガキがあ！」

「黙れ。お前は、お前は決して許されないことをした。大人ならまだしも、まだ一人前じやない子どもを、社会的弱者を殺した。その罪は重いぜ。

……こい”竜の炎壱式【碎刃】”

俺が碎刃を出しガルドをぶち殺そうと炎の刃を振り上げた瞬間
「待ちなさい！火焰君！」

ここでガルドを殺したら貴方が悪くなるのよ！」

「ダメだ飛鳥。コイツは”ダメ”だ。生かしておいやいけない」

「それでも貴方が悪人になる謂れはないわ。ここは修羅神仏が集う箱庭よ？なら箱庭らしくギフトゲームでガルドを裁きましょう」

なるほど、一理あるな

「分かった。ここは飛鳥を立ててそうしよう。

良かつたな……少しだけ長生きできるぞこの畜生が」

「さあ、私達と『ギフトゲーム』をしましよう。貴方のコミュニティの存続と私達”ノーネーム”の誇りと魂を賭けて、ね」

第6話

「ど、どうしてこの短時間でフォレス・ガロに喧嘩を売っているのですか!?しかもゲームの日程は明日?どのような考えがあつてのことですか!?聞いているんですか皆さん!!」

「「むしゃくしやしてやつた。反省も後悔も全くしていない」」「ぶち殺そうとしたら止められた。むしゃくしするのでそこら辺のコミュニティに殴り込みに行きたい」

「黙らつしやい!そんなことを聞いているのではありません!! 火焰さんはなんなんですか!悪質なテロリストですか!? 「なにを言つている。悪質じやないテロリストなんて存在しないだろう」

「そういう事を言つているんじゃありません!」

「まあまあ、あいつらもそう言つてゐるんだし許してやれよ」

十六夜のフォローが入る

「しかし…このゲームで得られるのは自己満足だけなんですよ?」

「まあ大丈夫だろ。勝てるんだろ?特に火焰」

「当然。魂まで燃やし尽くして箱庭のチリにしてやる」

「むく…まあそこまで言うなら良いでしよう。万が一火焰さんが駄目でも十六夜さんがいますし」

「なに言つてんだ?俺は出ねえぞ?」

「当たり前よ。貴方は参加させないわ」

フンッと鼻を鳴らしながら言う二人に黒ウサギが食つてかかつていう

「な、何故ですか!お二人は同じコミュニティの仲間ですから、ここは協力してもらわないと」

「違うよ黒ウサギ。これは私たちが売った喧嘩。十六夜がゲームに参加するのは無粹極まる」

「耀の言う通りだ黒ウサギ。それにうかうかしていたら奴は箱庭の外に逃げてしまうだろう?そん時は簡単に見つかるもんなのか?ジン」

「いえ。流石に箱庭の外に逃げられてしまうと広すぎて手の出しが
ありません」

「はあ……。仕方ありませんもう好きにしてください……」

「それでは気を取り直して行きましょうか。本当は皆さんを歓迎する
為に素敵なお店を予約していたのですけれども……不慮の事故続
きで今日はお流れになつてしましました。また後日にきちんと歓迎
を」

「ん、いや無理しなくてもいいぞ。ジンから聞いたけど俺らのコミュニ
ニティってそれはもう悲惨なくらいに崖っぷちなんだろ?」

「うつ……。も、申し訳ございません。皆さんを騙すのは気が引け
たのですが黒ウサギ達も必死だったのです」

「もういいよ。俺は組織の水準なんてどうでも良かつたし、黒ウサギ
が苦労詐欺だつて事も分かつたし」

「なんか発音おかしくありませんか!? うう…… 飛鳥さんと耀さんは
どうですか……？」

「私も別に組織の水準なんて気にしていないわ」

「私も怒つていない。そもそもコミュニティがどうの、というのは別
にどうでもいい……あ、けど毎日三食お風呂付きがあればいいな」

ジンの表情が固まる

この箱庭では水は貴重な資源なのだ

そんなジンを見て耀は慌てて取り消そうとしたが

「それなら大丈夫です! 十六夜さんがこんな大きな水樹の苗を手にい
れてくれましたから! これで水に関する苦労はおさらばです♪」

「私たちの国では水が豊富だつたから毎日のようにお風呂に入れただ
けど、場所が変われば文化も違うものね」

「そうだな。十六夜様々つてところか」

「あはは…… それじゃあ今日はコミュ二ティ帰る? 黒ウサギ」

「あ、ジン坊っちゃんは先にお帰りください。フォレス・ガロとのギフ
トゲームが明日なら”サウザンドアイズ”に皆さんのギフト鑑
定をお願いしないと」

「 „ サウザンドアイズ ” ？ コミュニティの名前か？」

「 Y e s 。 „ サウザンドアイズ ” は特殊な瞳のギフトを持つ者達の群体コミュニティ。箱庭の東西南北・上層下層の全てに精通する超巨大商業コミュニティです。幸いこの近くに支店があるのでそこで見てもらおうかと」

「なるほど。ギフトの鑑定 とは？」

「文字通り、ギフトの秘めた力や起源などを鑑定するのデス。自身の力を適切に理解していた方が、引き出せる力はより巨大になります。皆さんも気になるでしよう？」

この言葉に火焰を含む四人は複雑な表情で返す。思うことはいろいろあるだろうが拒否する事はなく、黒ウサギ、十六夜、飛鳥、耀、火焰の五人と一匹は „ サウザンドアイズ ” に向かつた